

2024（令和6）年度

教職課程
自己点検・評価報告書

日本赤十字秋田看護大学

2025（令和7）年5月

担当
教職課程専門委員会

① 教育理念・学修目標

1. 自己点検・評価

(評価区分)S:取り組みが卓越した水準である。 A:取り組みが概ね適切である。 B:課題があり努力が必要である。C:抜本的な改善が求められる。 D:取り組みがなされていない。 ※該当しない項目については(－)ハイフン

「大学全体レベル※1」「学科等レベル」

点検・評価項目	評価の視点	自己評価
(1) 教員の養成の目標及び当該目標を達成するための計画の策定状況	①具体的かつ明確な形で設定されているか	A
	②教員の養成の目標及び当該目標を達成するための計画と3つの方針との関係が必要に応じて意識されているか	A
(2) 教員の養成の目標及び当該目標を達成するための計画の策定プロセス	①学生や採用権者の意見の考慮、所在する都道府県・政令指定都市教育委員会の策定する教員育成指標との関係性の考慮が行われているか	A
(3) 教員の養成の目標及び当該目標を達成するための計画の見直しの状況	①一人一人の学生が教職課程での学修を通じて得た自らの学びの成果(以下「学修成果」という。)や自己点検・評価の結果、社会情勢や教育環境の変化等を踏まえた適切な見直しが行われているか	A

2. 前年度に指摘した問題点

<p>令和5年度自己点検・評価報告書に記載した次年度に向けた課題を記述する。</p> <p>「看護系大学で育成する養護教諭のコンピテンシー」報告書により、基本的にはすべての到達目標において、継続した向上が見られた。実習の前後、座学と実習相互の学びがつながり、実践を通して理解を深めることができた。特に「根拠に基づき個別・集団への支援を計画的に実践する能力」の習得について際立った成果を得ることができた。</p>

3. 現状説明

<p>点検・評価項目ごとに、令和6年度の現状(目標設定やその達成のための取り組みを含む)を記述する。</p>
(1) 「看護系大学で育成する養護教諭のコンピテンシー」をもとに、教員養成の目標に照らし合わせた自己評価がなされ、長期・短期の検証改善サイクルが機能している。
(2) 「秋田県教職キャリア指標」(養護教諭)をもとに、教員養成の重点や計画策定のプロセスに生かしている。また、県教委の担当者と連携し、本県が目指す教育の在り方とそれを実現する人材像について共有している。
(3) 履修カルテや「看護系大学で育成する養護教諭のコンピテンシー」をもとに、学修に対する自己点検・評価を通して、適切な見直しに生かそうとしている。また、折々の面談の機会に検証改善の視点から対話による現状の把握と指導助言を通じた促進に努めている。

4. 長所・特色

<p>現状説明の記述を踏まえて、それぞれの項目ごとに、大学として特に取り上げるべき「長所・特色」を記述する。</p>
<p>(1)「看護系大学で育成する養護教諭のコンピテンシー」並びに「教職課程の卒業時の到達目標」に関して毎年度末調査を実施し、カリキュラム評価を主としての集計・分析を行っている。</p> <p>(2)「秋田県教職キャリア指標」(養護教諭)をもとに、養成段階における育成すべき教員の資質能力について明らかにし、具体的な指導内容に即して指導・援助が実現できている。</p> <p>(3)履修カルテの評価や「看護系大学で育成する養護教諭のコンピテンシー」をもとに、毎学年末ごとに学生へ自己評価をさせ、結果の集計や分析をもとに養護教諭を育成する上での指導に役立てている。</p>

5. 問題点

自己点検・評価の結果、浮かび上がった問題を「現状説明」を踏まえて、それぞれの事項ごとに記述する。

【課題】

「看護系大学で育成する養護教諭のコンピテンシー」報告書により、基本的にはすべての到達目標において、継続した向上が見られるが、学校経営の視点や学校保健組織活動を実践する力が不十分である。また、法的根拠などについての理解がさらに深まるよう、事例に即して分かりやすい指導が必要である。

【目標】

到達目標の「人間性」「身に付ける基礎的な能力」「自己研鑽」等において、事前事後指導での学びと養護実習での体験を有機的に結び付けた具体的指導を強化し、今日的な課題を解決できる資質・能力を備えた養護教諭の育成を図りたい。

6. 全体のまとめ

「教育理念・学修目標」や「授業科目・教育課程の編成実施」といった単位ごとに全体のまとめを記述する。

養成段階における「教師としての使命感と倫理観」、「子供の個性の伸長と自立心の育成」、「教育課程の編成に対する理解」といった視点について、今年度においてもおおむね望ましい成果をあげることができた。

今後は、養護実習における現場での実践を軸として、教職科目や養護専門科目における学内での学びとの接続・応用を意識した教育課程の編成と実施に努めたい。

7. 根拠資料

NO	区分	名称
1	(1)－①、②、(2)、(2)	履修カルテ
2	(1)－①、②、(3)	「看護系大学で育成する養護教諭のコンピテンシー」調査報告書(1期生版'22/8/17)
3	(1)－②	学生便覧
4	(2)	秋田県教職キャリア指標(養護教諭)
5		

担当
教職課程専門委員会

② 授業科目・教育課程の編成実施

1. 自己点検・評価

(評価区分)S: 取り組みが卓越した水準である。 A: 取り組みが概ね適切である。 B: 課題があり努力が必要である。 C: 抜本的な改善が求められる。 D: 取り組みがなされていない。 ※該当しない項目については(一)ハイフン

点検・評価項目		評価の視点	自己評価
全 大 学 「 学 科 等 レ ベ ル 」 「 授 業 科 目 レ ベ ル 」	(1) 教職課程の授業科目の実施に必要な施設・設備の整備状況	①ICT(情報通信技術)環境(オンライン授業含む)、模擬授業用の教室、関連する図書など、教職課程の授業科目の実施に必要な施設・設備が整備されているか	A
	(2) 教育課程の体系性	①法令及び教員の養成の目標及び当該目標を達成するための計画と対応し必要な授業科目が開設され適切な役割分担が図られているか	A
		②教職課程以外の科目との関連性が適切に確保されているか	A
	(3) ICTの活用指導力など、各科目を横断する重要な事項についての教育課程の体系性	①教員として身につけることが必要なICT活用指導力の全体像に対応して各科目間の役割分担が適切に図られているか	A
		②到達目標や学修量が適切な水準となっているか	A
	(4) キャップ制の設定状況	①1単位あたりの学修時間を確保する上で有効に機能しているか	A
	(5) 教育課程の充実・見直しの状況	①学修成果や自己点検・評価の結果等を踏まえて充実が図られ、適切な見直しが行われているか	A
	(6) 個々の授業科目の到達目標の設定状況	①法令、教員の養成の目標及び当該目標を達成するための計画、学習指導要領及び教職課程コアカリキュラムへの対応が図られているか	A
	(7) シラバスの作成状況	①教員の養成の目標及び当該目標を達成するための計画と授業科目との関係、授業科目の目的と到達目標、内容と方法、計画、成績評価基準、事前学修と事後学修の内容等が明確に記載されているか	A
	(8) アクティブ・ラーニングやICTの活用など新たな手法の導入状況	①授業科目の到達目標に応じ、少人数のアクティブ・ラーニングやICTを活用した新たな手法を導入し、「考える」「話す」「行動する」などの多様な学びをもたらす工夫が行われているか	A
(9) 個々の授業科目の見直しの状況	①学修成果や自己点検・評価の結果等を踏まえて充実が図られ、適切な見直しが行われているか	A	
(10) 教職実践演習及び教育実習等の実施状況	①教職課程において特に重要な役割を果たす教職実践演習、教育実習(学校体験活動含む)は、事前指導・事後指導を含め、大学の主体的な関与の下で適切に行われているか	A	

2. 前年度に指摘した問題点

令和5年度自己点検・評価報告書に記載した次年度に向けた課題を記述する。
 電子黒板を導入したが、利用が進んでいない。教育実習や卒後の学校現場での活用に向けて、講義内容に盛り込むことが望まれる。
 「看護系大学で育成する養護教諭のコンピテンシー」並びに「養護教諭一種課程の卒業時の到達目標」調査結果によると、「根拠に基づき個別・集団への支援を計画的に実践する能力」「子供の健康を支える仕組みづくりができる(学校内外の連携)」の項目が他の項目と比較すると低い傾向にある。

3. 現状説明

点検・評価項目ごとに、令和5年度の現状(目標設定やその達成のための取り組みを含む)を記述する。

(1)	ICT環境としては、学生用コンピュータ室として「OA教室」が整備されている。教室内の情報端末およびプリンタ、関連するサーバが5年に一度の頻度で見直し、更新されている。令和5年度には、学内wifi回線の増設を実施した。また、154講義室に、タッチパネル式の電子黒板を設置し教育実習でのICT機器活用を図った。
(2)	養護教諭一種課程における卒業時到達目標を示し、必要な授業科目が開設されていることを確認するとともに、養護教諭一種課程コア・カリキュラムの履修モデルにもとづき養護教諭一種課程以外の科目との関連性が適切に確保されていることを確認した。授業科目の内容が教員養成の目標に合致しているかを確認することにより、科目間の役割分担が明確化され、教育内容の重複や不足を防ぎ、目標達成に向けた効果的な教育が提供されている。
(3)	①養護教諭一種課程にて開講されている各科目においてICTの活用指導に関連する部分においては情報教育担当教員が請け負っている。また、他の教職関連科目においてもICTを活用する際、必要に応じて該当教員がサポートに入り、円滑な講義運営が実施されている。 ②到達目標は、文部科学省に提出した科目目標に基づき、適切な水準となっている。情報関連科目および教職課程科目内の情報関連部分における学習量は、授業評価調査より、30分から60分程度と判明している。規定の時間通りとなっている。
(4)	教育課程全体を通じて1単位あたり45時間の学修時間を確保することを目標に掲げ、この目標を達成するため、キャップ制を導入し、年間の履修可能な単位数を最大50単位に制限している。これにより、各科目に割り当てられた授業時間、課題、予習・復習などの自主学修時間が適切に確保され、学生の過度な負担を防ぎながら、質の高い学修が行える体制を整えている。
(5)	「看護系大学で育成する養護教諭のコンピテンシー」調査結果をもとに、学修成果を踏まえて教育課程の充実が図られているか確認し、見直しに向けて課題を明確にした。
(6)	授業科目の内容及び方法についてシラバスに明記している。教員免許取得に適合した教育内容の設定について、文部科学省教職課程モデル・コア・カリキュラム(令和3年)を網羅していることを確認し、専門的知識と実践的能力を統合的に育成できるよう工夫している。
(7)	学生の主体的参加を促す授業形態、授業内容及び授業方法を目指し、シラバス記入要領をもとづいてシラバスを作成し、シラバスチェックリストで内容確認した。教員の養成の目標及び目標を達成するための計画と授業科目との関係、授業科目の目的と到達目標、内容と方法、計画、成績評価基準、事前学修と事後学修の内容等が明確に記載されている。
(8)	養護教諭一種課程の履修者は1、2年次で20から30名程度、3年次以降は10から15名程度である。講義中、必要に応じ随時ディスカッションが行われている。また、講義終了後は提示されたQRコードからリンクを読み取り、リンク先の回答事項に学生所有の電子機器から入力を行っている。また、近年、小中学校にて導入されているタッチパネル式電子黒板の活用に向けた演習も行われている。
(9)	「看護系大学で育成する養護教諭のコンピテンシー」調査結果をもとに、個々の学修成果を踏まえて教育課程の充実が図られているか確認した。また、授業評価アンケートや授業後のリアクションペーパーを用いて学生の学修状況を把握し、学生の疑問や課題に対応する取り組みを行った。
(10)	計画に従って適切に実施された。

4. 長所・特色

現状説明の記述を踏まえて、それぞれの項目ごとに、大学として特に取り上げるべき「長所・特色」を記述する。

- (1)現在、小中学校等ではGigaスクール構想が進められ情報機器や設備の拡充が進んでいる。それらへの対応のために情報機器やネットワーク設備及び電子黒板を整備し教育現場においてもICT機器を活用できる人材の育成に取り組んでいる。
- (2)教員に求められる資質能力はその時代背景とともに変化することからも多いことから、実務家系教員による学校現場の実情に合わせた的確な指導が行えるよう役割分担を行っている。
- (3)情報関連科目においては、本学の情報系担当教員が引き受け、必要に応じて他の教職教員を支援することでICT機器や情報サービスを活用した講義運営を行っている。学生の情報関連科目の学習時間は必要単位数に見合った学習時間を確保している。
- (4)(6)(7)各授業の開始時にシラバスの周知を図る。また、教育方法として講義・演習・グループワーク・フィールドワーク・養護実習など、学習の定着を図れるよう工夫している。教育実習においては、実習施設ごとの学習内容の差異が少なくなるよう担当教員がきめ細やかな指導を行った。
- (5)(9)全学年を対象として年度末に「看護系大学で育成する養護教諭のコンピテンシー」並びに「養護教諭一種課程の卒業時の到達目標」調査結果を実施している。その結果、コンピテンシー並びに養護教諭一種課程の卒業時の到達目標すべての項目でおおむね修得できている(「とともできる」「少しできる」)ことが確認できた。なかでも、「ヒューマンケアの基本に関する実践能力」「根拠に基づき個別・集団への支援を計画的に実践する能力」の修得が高かった。
- (7)シラバスの作成においては、各科目における授業目的・到達目標とディプロマ・ポリシー(卒業時に期待される能力)との関連について再検討した。
- (8)教職関連科目の受講者は多くとも30名、通常は20名以下となっており少人数での講義や演習となっている。また、随時、演習やディスカッションが行われており、常に活発な授業が展開されている。
- (10)計画に従って適切に実施された。

5. 問題点

自己点検・評価の結果、浮かび上がった問題を「現状説明」を踏まえて、それぞれの事項ごとに記述する。

【課題】

電子黒板を導入し、講義内にて使用について演習を行った。簡易なプレゼンテーションは実施できた。今後はより実践的な活用の修得に向けて検討していく必要がある。
「看護系大学で育成する養護教諭のコンピテンシー」並びに「養護教諭一種課程の卒業時の到達目標」調査結果によると、「健康課題に関する実践能力」「ケア環境とチーム体制整備に関する実践能力」の項目が他の項目と比較すると低い傾向にある。

【目標】

現状のICT活用状況の取りまとめと必要機材の検討、並びに、「根拠に基づき個別・集団への支援を計画的に実践する能力」「子供の健康を支える仕組みづくりができる(学校内外の連携)」授業内容の工夫等による改善を図る。昨年度購入した電子黒板の有効な活用について、教員研修を企画、実施することができなかったため、次年度以降の課題とする。

6. 全体のまとめ

「教育理念・学修目標」や「授業科目・教育課程の編成実施」といった単位ごとに全体のまとめを記述する。

情報設備、機器について、電子黒板の導入を実施した。小中学校等の各学校での情報機器や設備を注視しながら、ICT活用能力の育成を図ることが求められる。授業科目の配置や編成について、おおむね適切な状況となっている。また、看護系大学で養成する養護教諭は看護学を基盤とし、その上で養護教諭としての「教員共通に求められる実践力」と「養護教諭の専門性に関わる実践力」を習得する必要があるため、看護学部全体のカリキュラム・各授業科目との整合性を図りながら、養護教諭一種課程の卒業時の到達目標を実現できるよう評価と改善を図っていきたい。今後は、教育現場のニーズを反映したカリキュラムの工夫や、卒業生からのフィードバックを活用することで、教育内容のさらなる充実を図っていききたい。

7. 根拠資料

NO	区分	名称
1	(1)－①	OA教室 備品リスト、教職課程実習室 備品リスト
2	(3)－①	教職課程 担当科目一覧
3	(3)－②	情報リテラシー、教育方法技術論 授業評価(学習時間)
4	(4)①、(6)①、(7)①	シラバス
5	(5)①、(7)①、(9)①、(10)①	履修カルテ
6	(6)	文部科学省教職課程コア・カリキュラム(R3)
7	(8)－①	QRコード 例
8	(8)－①	電子黒板演習風景

担当
教職課程専門委員会

③ 学修成果の把握・可視化

1. 自己点検・評価

(評価区分)S:取り組みが卓越した水準である。 A:取り組みが概ね適切である。 B:課題があり努力が必要である。 C:抜本的な改善が求められる。 D:取り組みがなされていない。 ※該当しない項目については(-)ハイフン

点検・評価項目		評価の視点	自己評価
「大学全体レベル」	(1) 成績評価に関する全学的な基準の策定・公表の状況	①成績評価基準に基づく評語と授業科目ごとに定められている到達目標の達成水準との関係等が明らかにされているか	A
	(2) 成績評価に関する共通理解の構築	①同一名称の授業科目を複数の教員が分担して開講している場合に成績評価の平準化を図ることができているか	A
「学科等レベル」	(3) 教員の養成の目標の達成状況(学修成果)を明らかにするための情報の設定及び達成状況	①教員の養成の目標の達成状況を明らかにするための情報※2が適切に設定されており、それがどの程度達成されているか ※2:例えば、卒業時の教員免許状の取得状況や教職への就職状況のほか、所在する都道府県・政令指定都市教育委員会の策定する教員育成指標や「教学マネジメント指針」を参考としつつ各大学において設定することが考えられる。	A
		②教職実践演習に向けた「履修カルテ」を適切に活用できているか	A
「授業科目レベル」	(4) 成績評価の状況	①各授業科目の到達目標に照らしてできるだけ定量的又は定性的に達成水準を明らかにし、厳格に点数・評語に反映することができているか	A
		②公正で透明な成績評価という観点から達成水準を測定する手法やその配点基準があらかじめ明確になっているか	A

2. 前年度に指摘した問題点

<p>令和4年度自己点検・評価報告書に記載した次年度に向けた課題を記述する。 今年度、4年生の秋田県学校教諭等採用試験合格者がいなかったことから、将来の進路、就職に危機感、不安感をもつ学生がいることが考えられる。次年度以降も、地方公務員の定年引上げ制度にともない採用予定者数の調整が行われることが予想されることから、現役生、既卒生の継続的な支援が課題である。</p>
--

3. 現状説明

点検・評価項目ごとに、令和5年度の現状(目標設定やその達成のための取り組みを含む)を記述する。	
(1)	単位認定については、大学全体の基準に従い「S・A・B・C・D」の成績評価に加えf-GPAによる成績評価制度を導入している。各科目の単位認定については、総合成績がC以上を合格とし、学長が認定のうえ単位を与える。
(2)	オムニバス授業科目のシラバスには、科目ごとに明確な到達目標と成績評価基準を設定し、全担当教員がこれを共有している。これらの取り組みによって、学生に対して透明性のある成績評価を提供することができるとともに、教育の質保証にも寄与している。
(3)	秋田県教職キャリア指標(養護教諭)をもとに、教員の養成の目標の達成状況を検討するとともに、教職課程の卒業時の到達目標を履修カルテに記載し学生に周知している。「養護教諭一種課程の卒業時の到達目標」調査結果から、特に「子供1人ひとりと真摯に向き合い、愛情を注ぐことができる」の項目で高い達成度が見られた。
(4)	各授業科目における成績評価の配点基準を、シラバスに具体的に記載しており、到達目標に照らして達成水準も明らかにしている。また、成績評価に関する疑義に対して適切に対応する準備ができている。

4. 長所・特色

現状説明の記述を踏まえて、それぞれの項目ごとに、大学として特に取り上げるべき「長所・特色」を記述する。

- (1) 大学全体の基準に従い適切に実施している。
- (2) コンピテンシー調査では、年度末に自己評価を繰り返し行うことで、その推移を測定している。コンピテンシー調査では、養護教諭に必要な能力・技術について在学中から意識して取り組むことができるよう、学生の目的意識の向上を図っている。
- (3) 履修カルテについて、教職科目を履修する1年時より教職科目及び教職に関する学外活動、ボランティア、サークル活動等の状況に関する自己評価・反省を行い、教員による確認を行っている。
- (4) 複数の教員が分担している科目においても、各授業科目の到達目標に照らし授業内容、授業方法、評価基準、評価方法について共通理解し透明性のある成績評価を行っている。

5. 問題点

自己点検・評価の結果、浮かび上がった問題を「現状説明」を踏まえて、それぞれの事項ごとに記述する。

【課題】

今年度の秋田県学校教諭等採用試験合格者は、大学推薦選考の1名のみだったことから、現役合格の困難さを感じ、将来の進路、就職に危機感、不安感をもつ学生がいることが考えられる。次年度以降も、児童生徒数減少に伴う学校数減少等の理由により採用予定者数の調整が行われることが予想されることから、現役生、既卒生の継続的な支援が課題である。

【目標】

「看護系大学で育成する養護教諭のコンピテンシー」並びに「養護教諭一種課程の卒業時の到達目標」調査結果にもとづき、次年度以降の授業内容、採用試験対策の強化を図るとともに、学生の危機感や不安感に対する丁寧な支援を行い、学生自身が自己実現をはせるよう学生指導を行う。

6. 全体のまとめ

「教育理念・学修目標」や「授業科目・教育課程の編成実施」といった単位ごとに全体のまとめを記述する。

養護教諭一種課程の質的水準の向上の具体策として、平成18(2006)年度中央教育審会答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」において、履修カルテの必要性が示されていることから、教職実践演習における活用に留まることなく、養護教諭一種課程4年間の学びを支える教員養成全般に活用する。さらに、評価結果を学生にフィードバックし学修成果を可視化することで、自己理解と学修意欲を高めるとともに、達成状況のデータを分析することで、教育内容や評価手法の改善に活かしている。

7. 根拠資料

NO	区分	名称
1	(1)①	大学学生履修便覧
2	(3)①	秋田県教職キャリア指標(養護教諭)
3	(3)②	履修カルテ
4	(4)①	シラバス
5		

担当
教職課程専門委員会

④	教職員組織
---	-------

1. 自己点検・評価

(評価区分)S:取り組みが卓越した水準である。 A:取り組みが概ね適切である。 B:課題があり努力が必要である。 C:抜本的な改善が求められる。 D:取り組みがなされていない。 ※該当しない項目については(－)ハイフン

点検・評価項目		評価の視点	自己評価
「大学全体レベル※3」 「学科等レベル」 「授業科目レベル」	(1) 教員の配置の状況	①教職課程認定基準(平成13年7月19日教員養成部会決定)で定められた必要専任教員数を充足しているか	A
	(2) 教員の業績等	①担当授業科目に関する研究実績の状況、担当教員の学校現場等での実務経験の状況	A
	(3) 職員の配置状況	①教職課程を適切に実施するため、事務組織を設け、必要な職員数を配置できているか	A
	(4) FD・SDの実施状況	①いわゆる教科専門の授業科目を担当する教員や実務家教員も含め、教員の養成の目標及び当該目標を達成するための計画への理解をはじめ教職課程を担う教員として望ましい資質・能力を身に付けさせるためのFD・SDが確実に実施されているか	A
		②適切な内容※4が実施できているか ※4:例えば教員の養成の目標及び当該目標を達成するための計画の共有のほか、「教学マネジメント指針」(IV)を参考としつつ内容を検討することも考えられる。	A
(5) 授業評価アンケートの実施状況	③実際に参加が確保できているか	A	
		①個々の授業科目の見直しに繋がるFDの機会を活用できるように、効果的な授業評価アンケートの作成・実施が行えているか	A

2. 前年度に指摘した問題点

令和5年度自己点検・評価報告書に記載した次年度に向けた課題を記述する。
【課題】 特に目立った課題は見られないが、担当教職員の充足の維持、各々における継続的な自己研鑽が望まれる。
【目標】 教職員における充足の維持及び自己研鑽が望まれる。教職科目担当教員の退職に伴い、スムーズな引継ぎを行う必要がある。

3. 現状説明

点検・評価項目ごとに、令和6年度の現状(目標設定やその達成のための取り組みを含む)を記述する。	
(1)	必要人数は充足している。教員退職に伴う引継ぎも円滑に実施されている。
(2)	文科省並びに学内の教員審査を経ており、研究実績並びに実務経験は十分といえる。
(3)	事務局学務課内に担当者を配置し、必要十分な状況である。
(4)	①実施できている。12月に秋田県教育庁から人事担当者を招き実施した。 ②学生とともに「秋田県が求める教師像」や採用の現状などについて説明を受けている。研修会には教員の過半数が参加している。欠席した教員にも使用した資料を共有し、定例の会議での報告を通して情報共有されている。
(5)	各講義終了後に、授業評価を実施している。適宜、教員自身でも学生の振り返り調査を実施している。

4. 長所・特色

現状説明の記述を踏まえて、それぞれの項目ごとに、大学として特に取り上げるべき「長所・特色」を記述する。

- (1) 基準に沿った必要専任教員数を充足している。
 - (2) 文科省や学内における教員審査を受け、必要十分な研究実績と実務経験を有している。
 - (3) 適切に事務担当者を配置している。
 - (4) 秋田県教育庁から教員採用人事担当者をお招きし、求める教師像や採用、教師としてのやりがいなどについて学んでいる。
- 次年度の令和8年度教員採用試験から秋田県における教員採用試験の方法が大幅に変更されたことが発表された。それを受け、秋田県教育庁人事担当をお招きし変更点や注意、教育者としての思い等について講習していただいている。

5. 問題点

自己点検・評価の結果、浮かび上がった問題を「現状説明」を踏まえて、それぞれの事項ごとに記述する。

【課題】

特に目立った課題は見られないが、担当教職員の充足の維持、各々における継続的な自己研鑽が望まれる。また、秋田県における教員採用試験の方法が大幅に変更された。そのため、実施した採用試験問題の分析等をする必要がある。

【目標】

教職員における充足の維持及び自己研鑽が望まれる。
秋田県教員採用試験における方法の変更を受け、変更点についての分析し採用試験対策として行っている補講内容を検討する

6. 全体のまとめ

「教育理念・学修目標」や「授業科目・教育課程の編成実施」といった単位ごとに全体のまとめを記述する。

教職員組織は適切に配置されている。今後は、充足の維持、FDSDの学びの継続等に努めたい。

7. 根拠資料

NO	区分	名称
1	(1)①	教職課程認定基準
2	(2)①	教員履歴(リサーチマップ)
3	(3)①	事務組織図
4	(4)①②	県教育庁 資料
5	(5)①	授業評価アンケート結果

担当
教職課程専門委員会

⑤	情報公表
---	------

1. 自己点検・評価

(評価区分)S:取り組みが卓越した水準である。 A:取り組みが概ね適切である。 B:課題があり努力が必要である。 C:抜本的な改善が求められる。 D:取り組みがなされていない。 ※該当しない項目については(－)ハイフン

「大学全体レベル」

点検・評価項目	評価の視点	自己評価
(1) 学校教育法施行規則(昭和22年文部省令第11号)第172条の2のうち関連部分、教育職員免許法施行規則第22条の6に定められた情報公表の状況	①法令に定められた情報公表が学外者にもわかりやすく適切に行えているか	A
(2) 学修成果に関する情報公表の状況	①大学が必要な資質・能力を備えた学生を育成できているかどうかを、エビデンスとともに説明できているか	A
(3) 教職課程の自己点検・評価に関する情報公表の状況	①根拠となる資料やデータ等を示しつつ、わかりやすい自己点検・評価の評価書を公表することができているか	－

2. 前年度に指摘した問題点

令和4年度自己点検・評価報告書に記載した次年度に向けた課題を記述する。 養護教諭一種課程の自己点検・評価に関する情報について、引き続き検討中である。

3. 現状説明

点検・評価項目ごとに、令和5年度の現状(目標設定やその達成のための取り組みを含む)を記述する。
(1) 法令に定められた情報公表を行っている。
(2) 卒業生の教員免許状の取得の状況、卒業生の教員への就職の状況等、学修成果に関する情報公表を行っている。
(3)

4. 長所・特色

現状説明の記述を踏まえて、それぞれの項目ごとに、大学として特に取り上げるべき「長所・特色」を記述する。
(1)(2)適切に情報公開を行っている。

5. 問題点

自己点検・評価の結果、浮かび上がった問題を「現状説明」を踏まえて、それぞれの事項ごとに記述する。
【課題】 養護教諭一種課程の自己点検・評価に関する情報について、引き続き検討中である。
【目標】 養護教諭一種課程の自己点検・評価に関する情報公開について、大学事務局と相談の上決定する。今後は、学修成果に関するデータの蓄積・分析を進め、エビデンスに基づく公表体制の構築について検討する。

6. 全体のまとめ

「教育理念・学修目標」や「授業科目・教育課程の編成実施」といった単位ごとに全体のまとめを記述する。
 秋田県内で唯一の養護教諭一種免許が取得できる高等教育機関であることから、看護師養成の学修を基盤として養護教諭専門科目を学修することにより、高い専門性を習得することを目指す。また、これからの社会で求められる人材像を踏まえた教育の展開、実践的指導力を有する教員の育成に重点をおくことなどを示すことにより、養護教諭を目指す学生の意欲向上と大学における主体的な学びにつながる情報公開に努める。

7. 根拠資料

NO	区分	名称
1	(1)(2)	本学HP(https://www.rcakita.ac.jp/faculty/teacher_training)
2		
3		
4		
5		

担当
教職課程専門委員会

⑥	教職指導(学生の受け入れ・学生支援)
---	--------------------

1. 自己点検・評価

(評価区分)S:取り組みが卓越した水準である。 A:取り組みが概ね適切である。 B:課題があり努力が必要である。 C:抜本的な改善が求められる。 D:取り組みがなされていない。 ※該当しない項目については(－)ハイフン

「大学全体レベル※5」
「学科等レベル」

点検・評価項目	評価の視点	自己評価
(1) 教職課程を履修する学生の確保に向けた取組の状況	①教職課程に関する積極的な情報提供の実施ができているか	B
	②教員の養成の目標に照らして適切に学生を受け入れているか	A
(2) 学生に対する履修指導の実施状況	①必要な体制や施設・設備を整えた上で、個々の学生の教職に対する意欲を踏まえつつ、学生に教職課程の履修に当たって学修意欲を喚起するような適切な履修指導が行えているか	A
	②「履修カルテ」を適切に活用できているか	A
(3) 学生に対する進路指導の実施状況	①学生に教職への入職に関する情報を適切に提供するなど、学生のニーズに応じたキャリア支援体制が適切に構築されているか	A

2. 前年度に指摘した問題点

<p>令和5年度自己点検・評価報告書に記載した次年度に向けた課題を記述する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教職課程が設置されて6年目、1期生、2期生が養護教諭の資格を取得しているが、看護師を経てから養護教諭を目指すという学生が増えてきている。 ・学生交流会がやむを得ない事情で開催できない場合は、予備日を設けるなどの対応を考えておく。

3. 現状説明

点検・評価項目ごとに、令和6年度の現状(目標設定やその達成のための取り組みを含む)を記述する。	
(1)	秋田市教育委員会と密接に連携を図り、必要に応じて訪問し協議するなど、教職課程に関する積極的な情報交換を行っている。一方で、全国的に教職志望者が減少しており、魅力ある職業であることは認識しているものの、業務の困難さやワーク・ライフバランスの視点から敬遠されがちである。この理解を覆す教職の魅力を知周知するには至っていない。
(2)	教職課程専門委員会において、必要な指導体制や情報交換を密接に行い、得られた情報を基に適切に学生への働きかけを行っている。その都度、履修カルテに記載させ、年度末には指導担当者による確認と指導を行っている。
(3)	学生相互の活動として、7月(教職課程を視野に入れている2年生と1年生)と、2月末(教職課程の4年生と、同3年生、教職科目を受講している2年生と1年生による希望者)に学生交流会を計画している。 また、秋田県教職キャリア協議会のメンバーと連携し必要な情報を得て、適宜情報を提供している。 教員採用試験対策の補講に秋田県教育委員会を招聘し、採用動向や県の特色などについて伺い、採用試験突破に向けた構えを整えている。また、本学教職課程教員が学年を分担し、教職課程(希望している学年は暫定者)メンバーと教職面談を行い指導・支援並びに情報交換を図っている。なお、採用試験受験後には、試験内容について報告カードを提出させ、採用試験情報を蓄積している。

4. 長所・特色

<p>現状説明の記述を踏まえて、それぞれの項目ごとに、大学として特に取り上げるべき「長所・特色」を記述する。 望ましい養護教諭の育成を念頭に、秋田県教育委員会と本学の教職課程専門委員会教員とで密接に連携を図っている。秋田県教育委員会の要望や期待する教員像を捉え、教職課程の学生への指導に役立てている。</p>
--

5. 問題点

自己点検・評価の結果、浮かび上がった問題を「現状説明」を踏まえて、それぞれの事項ごとに記述する。

【課題】

- ・教職課程が設置されて7年目、3期生までが養護教諭の資格を取得しているが、奨学金の返済もあり、看護師を経てから養護教諭を目指すという学生が増えてきている。
- ・教職履修の困難さや教職の社会的評価が背景となり、1年生の希望者が減った。今後は、教職の魅力をもっと語りながら、夢と目標を持ち挑戦する学生を増やしたい。
- ・実習に関しては、10～11月に次年度の実習受けて入れ依頼を行い実習先の確保を依頼しているが、学校数の減少等により秋田市教育委員会も苦慮している。今後は、実習校の確実な確保に向けた方策を検討し、実り多い実習を保障できる基盤を整えていく必要がある。

【目標】

- ・養護教諭が学校教育現場における重要なポジションであること、養護教諭の魅力ややりがいを養成課程において十分に伝え、意欲の向上を図り、養護教諭を目指す学生を増やしたい。
- ・今後は、教職の魅力についてさらに理解を促すとともに本学における合格実績を積み上げることに注力したい。

6. 全体のまとめ

「教育理念・学修目標」や「授業科目・教育課程の編成実施」といった単位ごとに全体のまとめを記述する。

秋田県教育委員会や各市町村教育委員会と本学との信頼関係が構築できている。本学の特徴である看護の強みを生かした社会に必要とされる養護教諭の育成に一層取り組んでいきたい。

7. 根拠資料

NO	区分	名称
1	(1)、(2)、(3)	教職課程専門委員会議事録
2	(1)、(2)、(3)	履修カルテ
3	(3)	教員採用試験報告カード
4		
5		

担当
教職課程専門委員会

⑦ 関係機関等との連携

1. 自己点検・評価

(評価区分)S:取り組みが卓越した水準である。 A:取り組みが概ね適切である。 B:課題があり努力が必要である。 C:抜本的な改善が求められる。 D:取り組みがなされていない。 ※該当しない項目については(－)ハイフン

「大学全体レベル」

点検・評価項目	評価の視点	自己評価
(1) 教育・委員会や各学校法人との連携・交流等の状況	①教員の採用を担う教育委員会や各学校法人と適切に連携・交流を図り、地域の教育課題や教員育成指標を踏まえた教育課程の充実や学生への指導の充実につなげることができているか	S
(2) 教育実習等を実施する学校との連携・協力の状況	①教育実習を実施する学校と適切に連携・協力を図り、実習の適切な実施につなげることができているか	A
	②学校体験活動や学習指導員としての活動など学校現場での体験活動を行う機会を積極的に提供できているか	A
(3) 学外の多様な人材の活用状況	①学外の諸機関との連携の下、教育課程を充実するために学外の多様な人材を実務経験のある教員又はゲストスピーカー等として活用することができているか	S

2. 前年度に指摘した問題点

令和5年度自己点検・評価報告書に記載した次年度に向けた課題を記述する。
 定年延長や再任用制度により、教員の新規採用数の募集定員が年々少なくなり、特に現役合格者は非常に少ない。幸い、教員採用支援対策が充実し、1次試験突破者が述べ4名確保できた。そのうち1名が本県の採用を勝ち取った。

3. 現状説明

点検・評価項目ごとに、令和6年度の現状(目標設定やその達成のための取り組みを含む)を記述する。

(1) 春・秋と秋田市教育委員会や関係市町村を訪問し実習依頼や御礼を継続し密接な関係構築に努めている。県のキャリア協議会としての立場から関係各位と連携し情報交換を活性化してきた。教育委員会とつながることで、カウンターパートナーとしての信頼関係が育っている。

(2) 実習依頼時期を2年生の11月に早めたことで、市町村教育委員会や各学校の見通しが十分に図られている。実習期間中において、本学の指導教員が各実習校を訪問し、適切に連携・協力を図っている。管理職へ挨拶や実習指導教官である現場の養護教諭と情報交換を行い、実習生への指導に生かしている。

(3) 教員採用試験に係る特別講座として、秋田県教育委員会を招聘し教職への魅力を伝えていただいた。また、本学の4年生に依頼し、プレゼンや質問を受けながら受験突破へ向けた情報を提供していただいた。また、教職実践演習では、特別支援学校へのフィールドワークを行うとともに、現場の養護教諭に特別講座の講師に依頼するなどして、多面的な学びの充実に努めている。

4. 長所・特色

現状説明の記述を踏まえて、それぞれの項目ごとに、大学として特に取り上げるべき「長所・特色」を記述する。
 実習期間中は、全ての実習生に対して、各小・中学校に一度は本学教員が訪問し、実習生への指導と実習校との連携に努めている。学生にとっての悩みや要望、各実習校のご意見等を丁寧に受け止め、連携・交流に生かしている。

5. 問題点

自己点検・評価の結果、浮かび上がった問題を「現状説明」を踏まえて、それぞれの事項ごとに記述する。

【課題】
 教員採用支援対策が充実しており、得点は年々向上してきている。しかし、定年延長や再任用制度により、教員の新規採用数の募集定員が年々少なくなってきたり、採用状況は厳しくなってきたり。

【目標】
 秋田県教育委員会の人事担当者などに対し、機会あるごとに本学の教育について発信し理解を得るとともに、県教育委員会との連携強化に努め、教員採用試験の実績の向上につなげていく。将来的には、大学推薦をもう一枠確保したい。

6. 全体のまとめ

「教育理念・学修目標」や「授業科目・教育課程の編成実施」といった単位ごとに全体のまとめを記述する。
 本学教員について、教員免許状所持はもちろんのこと、現場における管理職としての指導経験、教育委員会勤務、養護教諭としての実務経験等、豊かな実務経験のもと、県市教育委員会や学校教育現場とよりよい関係性を築くことができている。このことは、教育理念・学修目標を達成させる上で大きなアドバンテージとなっている。今後においてもこの関係性を豊かに築いていきたいと考える。

7. 根拠資料

NO	区分	名称
1	(1)、(2)、(3)	教職課程専門委員会議事録
2	(3)	特別講座振り返り、同御礼状
3		
4		
5		